



第 20 号  
発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科  
人文学部 同窓会  
山口大学人文学部内  
電話 (083) 933-5200

(連絡事務所)  
山口市平井773-2  
沖田ビル202

電話・FAX  
(083) 928-4527  
郵便振替口座  
01500-4-15902

## 「同窓会連合会募金に 一層のご協力を」

鴻文会会長 有馬正人

開学五十周年を期して、廣中学長の発案でわが鴻文会、鴻理会(理)、鳳陽会(経済)、時雍会(教育)、常盤工業会(工)、霜仁会(医)、農会(農)、双樹会(医療技術短大)の八つの組織にブリッジが架けられ「連合同窓会」が結成され、山口大学としての「同学意識」を醸成することになったのはご存じの通りであります。

この連合同窓会のもう一つの大事業は国立大学の「独立行政法人」への移行、国立大学のリストラに備え、「支援財団」の設立という仕事です。この仕事は全学の力を結集して対処しなければならぬ大事業であるといえます。将来国立大学は一県一大学として存続することは望めず、十八歳人口の減少と相俟ってやがて淘汰が始まると考えられており、その折には極めて優れた特色のある大学、財政的基盤を背景に発展を目指す大学が生き残れると思います。

この募金状況は、未だ目標の三十%弱といったところです。全学の卒業生約六万名、一万円ずつ拠出して十分賄える数字ではありませんが、現実には中々そうはいきません。特に長期にわたる不況や、先行き不安の中でOBの皆さんも快く浄財を提供してくれるにはやや抵抗がある

かと思えます。だが皆様の「愛校の志」に待つよりすべがありません。我々は旧学制のなかで経済専門学校、工業専門学校、師範学校、医学専門学校のように最終学府の先輩がいませんので、鴻理会と同様に直接の先祖がおりません。彼等には長年蓄えた資金もあり、先輩からの調達も容易ですが、我々にはそのゆとりと資金力がないのが残念です。

それでも、我々はその状況の許す最大限の努力と協力をすべきだと思っております。今一層、鴻文会の皆様のご協力と最大限のご努力をお願いする次第です。因みに、八月三十一日現在の各部の募金状況は次ページの通りです。

ご覧の如く、わが鴻文会としてはいささか不本意な数字となっております。色々ご都合もありませんが、今一つ後輩の為に、そして本学が誇るべき大学として存続するためにも一層のご協力とご支援をお願い申し上げます。ご支援をお願いします。

(ご送金の際は鴻文会と明記) もう一つ皆さんにご報告したいのは、記念講演会及び懇親会の「鴻理会」との共催の問題です。このことは鴻理会からも提案がありました。総会は学部別々に開催するが、講演会及び懇親会は一層にやろうということです。鴻理会ではす

学 部	寄付者数	寄付金額
鴻 文 会	322	3,503,500
時 雍 会	1,455	13,905,000
鳳 陽 会	734	9,625,000
鴻 理 会	365	4,245,000
霜 仁 会	1,018	18,610,000
常盤工業会	812	10,745,500
農 会	322	3,493,000
双 樹 会	253	2,240,000
名 誉 教 授	60	1,660,000
不 明	0	0
計	5,341	68,027,000

(振り込み先) 一口 5,000 円

01330-9-64146 (郵便振替番号)

(加入者名) 山口大学同窓会連合会

に常任幹事会において二〇〇一年度総会について、  
 一、総会は別に行うが、その後の講演会、懇親会は合同で行う。  
 二、期日は二〇〇一年八月頃とする。  
 ということが決議されたと聞いております。わが鴻文会も去る二年五月二十七日の役員会においてこれを審議致しまして満場意義なく了承いたしましたのでご報告申し上げます。  
 もともと、理学部(鴻理会)とは、前身は山口大学文学部として発足し、その前の前学制度は「旧制山口高等学校」であり私は「一卵生双生児」だと思っております。卒業生の多くは「旧帝国大学」に進学しているため、他の学部(旧制高専)のように直接の先輩がいないことも同じです。  
 それでも我々は基礎的な学問の府として大いに誇りを持つべきであります。同

じょうな状況のなか  
 に育った両同窓会が  
 お互いに力を合わせ  
 て事に望むことは大  
 変好ましいことであ  
 ります。  
 このことにより相  
 互の理解と協調によ  
 り鴻文会、鴻理会が  
 山口大学の同窓会の中  
 でユニークな存在  
 として活躍を期待す  
 る次第であります。  
 同窓生、在学生の  
 ご理解をお願いいた  
 す所存であります。

## 山口大学大学院東アジア研究科 (後期3年博士課程) 構想について

山口大学人文学部長 田 中 晉

山口大学に大学院博士課程「東アジア研究科」を設立する構想につき、その経緯と設置の趣旨について若干述べさせていただきます。山口大学人文学部博士課程新設の案は既に三、四年前からありましたが、山本和之前人文学部長のもと、具体的な構想作りに着手したのが平成十一年の早春でありました。全学的にも、文系大学院博士課程の設立が要望されるなか、設置準備委員会が組織され、委員の皆さんの精力的なご尽力のお陰をもって構想案がまとまり、平成十二年三月、文部省に対し第一回目の説明を行いました。その後、幾多の折衝の過程で当初の案は変更してきましたが、この一年、実に慌ただしい時の動きのうちに事態が展開し今日に至っております。

この研究科構想の目的は、東アジアを舞台上に活躍できる人材の養成にあり、人文学部と経済学部の二学部がその中心となっております。二十一世紀において、東アジアの演ずる役割には極めて重要なものがあると思われれます。本研究科は、歴史的に日本とかわりの深い、中国、朝鮮半島、近隣アジア諸国の形成とその実相を認識し、それらが今後いかに歴史的に展開してゆくか、東アジアの明日を示唆する問題の把握を研究課題とするものです。主なスタッフは人文と経済の、学部、研究科と重なりますが、従来の学部、大学院修士課程の域を超えた独立した研究科において、学際的な教育研究を志すものです。このうち人文の受け持つ研究領域の主眼は、日本と東アジアについて、思想、歴史、言語、文化、社会に

亘って、その諸相を探索することにより、各民族の固有性を解明することにあります。他を知って自己を知り、自己を知って他を知るとき、個性と個性の間の相互理解が可能となります。この相互の理解が得られたときに、はじめて東アジアの諸問題に対処する方策が提示され得るものであり、それは深い学識に基づいたものでなくてはなりません。このような意図のもとに我々人文学部のスタッフは「東アジア研究科」の基幹の一翼を担うこととなります。旧制山口高等学校より我が人文学部に受け継がれた先達の文化遺産を大切に、これを活かして将来にたいでいくことが我々に課された責務でありましょう。

幸いにして、文部省の理解を得ることができ、「東アジア研究科」構想が十三年度概算要求事項に盛り込まれましたが、これから設置審議会を経て、大蔵省の認めるところとならなければ実現には至らないのですから、まだまだ安心はできません。もしも実現すれば、平成十三年四月発足の運びとなり、国立十七大学人文学部において、はじめての大学院博士課程新設の快挙でありますから、各位からも注目を浴びており、それだけにこれからも一層心してかからねばなりません。願わくば、同窓諸兄弟のご声援を得て、首尾よく事が成就しますようにと念じております。

# 開講!!やまぐちサタデー・カレッジ

—卒業生の皆さん、

母校でまた学んでみませんか—

岡光 一 浩

今許されるなら、大学に帰って存分に勉強してみたい、学生時代は多少いい加減に過ごしたけれど、本当は自分は勉強が好きなのだ、そんなふうに思っている方々の方にはありませんか。いまさらなにをいい気になって、なんて誰も言いません。機を逸して初めて事の大切さに気付くというのは人の常、誰しもあることです。そんな「また大学で勉強したい」という社会人に、皆さんの母校、山大人文学部は、二〇〇一年四月から大学内キャンパスにおいて、大学の講義を大々的に開放いたします。

人文学部は様々な分野の研究者集団であり、その研究成果は教育という形で学生に伝達されるだけでなく、すでに平成元年から毎年県内各地で行われた公開講演や学部内での公開講座において幅広い年齢層の人々の知的探求心に応えてきました。そしてそれらの出席者からは、一様に人文学部の学問に対する強い関心や興味が多く寄せられ、それはそのまま、人間が人生観や世界観を作り上げるために欠かせないものにはなにか、現代のようにな成熟した社会における真の学問の府とは何かを語ってくれるものであります。私たち人文学部は、こうした社会の要請

を真剣に受けとめ、人材や施設などの「資源」を大学と地域社会の連携や大学の地域社会への貢献に役立てるため、来年度四月より従来の学部で行っていた公開講座を発展させる形で、人文学部の学問を網羅する様々な分野の講座「やまぐちサタデー・カレッジ」を土曜日の午後八時～九時30分まで、山大人文学部内において開講することになりました。その開講コースは「やまぐち学コース」「異文化交流コース」「現代文化コース」「日本文化コース」「外国語学習コース」の五つで、それぞれ八回ないしは一回の講義を予定しています。

この「やまぐちサタデー・カレッジ」の大きな特徴を二つだけ挙げてみます。一つは、講座の内容が、社会のニーズを意識しつつも、カルチャーセンターや自治体のそれとは異なった、よりアカデミックな、大学での講義に近いものであり、大学の取り組み生涯学習講座としての理念をはっきりと明示したものとなっています。そしてもう一つは、この生涯学習講座を、ただ大学教育を外に向かって提供して社会のニーズに応えるだけでなく、地域や社会人のもつ経験を学生に提供していただき、学生と、或いは学部と社会

相互の関係を養う場とすることです。すなわち、社会人と学生の双方向の交流を目指す講座としたいと考えるものです。大学のキャンパスは若者だけのものではないと考えます。あらゆる世代の交流する空間、それこそがこれからの大学のキャンパスです。熟年の生涯学習者が連れ立ってキャンパスを闊歩し、校庭のベンチでは、あたたかもソクラテスとファイドロスよろしく、高齢の学習者が学生にそつと世の中や人生を語っている、こうした光景の日常化したキャンパス、そこにおいてこそ、大学の内的・外的風景も一変するのではないのでしょうか。卒業生の皆さん、ウィークエンドは再び母校の「大学生」になって、熟年向学の夢を進ませてみませんか! 詳細な募集要項等のパンフは只今製作中です、ご希望の方は人文学部(〇八三一九三三―五二〇〇)或いは鴻文会の連絡事務所までご連絡下さい。お待ち申し上げております。

(人文学部教授)

今、かなり感傷的になっている。会報への原稿依頼とともに、学生時代の友の死を知らされた。この六月のこと、五十三歳、肝硬変だったとか。そういえば酒の好きな奴だった。一年後輩で、鳳陽寮の同じ部屋に一年間暮らした。私が後河原に下宿した後も、

## 学友の死

柴田 勝 章

(中国哲学・文理解第十七回卒)

なぜか気が合い、よくつるんでいたものだ。そのうち、仲間うちで同人誌を出すことになった。「複眼」と称した。もちろん創刊号で廃刊だった。それぞれに小説もどきを発表した。私は「ばかものがたり」を書いた。周辺の奴らがモデルだった。死んだあいつも登場し、酔っ払って白転車ごと川に飛び込んだりする。いつも下駄履き、よれよれのダスターコート姿、今も目に浮かぶ。私を含め当時の仲間の共通点といえば、ばかであることだったろう。あいつも、じゅうぶんにはかだった。私は、ばかが好きだった。大学には五年いた。最後の年に大学は移転した。川向こうの田んぼの中に出現した美しくも空々しいキャンパスに、何度かは通った。が、私の中にある学園は、掘端にカマボコのように並んだ、木造二階建ての、古ぼけた、小汚い校舎や学生寮だ。そばの一の坂川には、ホタルが明滅し、カジカが鳴いていた。「柳桜をこきまぜて 春も錦となりくれば 後河原の枝並に……」

夜更けにあいつらと高吟した鳳陽寮道遥歌の一節である。そのとき見たホタルは、私のうつつとうしく、重苦しい日々を肉感的に彩ってくれた。

剣道、ギター、学生新聞、同人誌……いろいろな手を出し、どれも中途半端だった。中国哲学研究室の不良学生で、講義にも、学生運動にも、恋愛にも、集中できなかった。わけもわからぬままに、

唯一、仲間たちとのばか騒ぎが、はっきりした空白を埋めてくれた。その一人の死が、この文を書かせた。私は新聞記者で、書くことが仕事だが、こんなやりきれない思いで文章をつづったことはない。

こんな文が、同窓会の会報にふさわしいかどうかは知らない。ただ、いまなお私の中に、あざやかに生きる、あいつに頭をたれたいばかりである。

(朝日新聞社)

## 第二の故郷山口

平尾 美恵子

(国文学・文壇第二十三回卒)

私が山大を卒業してから、早二十数年が経とうとしております。忘れかけていた当時のことを、糸を手繰るように思い出すという作業は、少々痛みを伴うものの非常に楽しいものでした。

私にとって歴史的に由緒ある山口は、新時代の胎動を感じさせる地であったように思います。学内の喧嘩と熱気、封鎖された校舎、若者たちのシユプレヒコール、夜中に聞こえる山大学生歌、それらの「点」は太い「線」となり、当時、私の心を揺さぶり続けました。

悩める学生だった私は、所在なく樫野川の川辺や山口の街を彷徨い歩いたこともありました。漠とした不安が、私を追い立てていたのでしょうか。そんな私に一筋の光明をもたらしてくれたのは、多くの仲間との語りでした。思えば、研

究室やサークルの先輩、後輩と、居酒屋や下宿でよく杯を酌み交わし、議論をしたものです。瑠璃光寺の五重の塔の下で、月を愛でながら文学を語り合ったこともありました。また、関一雄先生のご厚意で、幾度かご邸宅に招いて頂き、国文科同期生の皆が、奥様の手料理に舌鼓を打ったこともいい思い出です。卒業した後、一度お招きに与りました。

ささやかな家具とたくさん書物の中で暮らした私達。そこには、情報化社会が到来する前の、良き時代の生活があったように思われます。温かい人々に囲まれ、悠久の静寂とも思える時間の中で学問にいそしみ、大学生活を送れたことに、今は感謝の気持ちで一杯です。

教師となつて関西に出てから現在に到るまで、山口は第二の故郷として心の奥に深く刻まれております。この次、山口の地に立った時、「あ、おまへは何をして来たのだと、吹き来る風が私にいふ」(中原中也の「帰郷」より)のではないのでしょうか。是非もう一度、風光明媚な山口を訪ねたいと思うこの頃です。

## 湯田・山口そして平川のこと

古門 雅 高

(国史学・文壇第二十七回卒)

今から二五年前、山口大学受験のため湯田温泉駅に降りた私は、思わず「鄙びた駅だな」と感じてしまった。しかし狭い通りを歩いていくうちに印象が変わっていき、たどり着いた町のイメー

ジは、駅のそれとは大きく異なっていた。そこは浴衣姿の観光客でにぎわう活気に満ちた温泉街であったのだ。裏通りや路地は、限定的な雰囲気にも包まれ、夕暮れともなれば、お座敷に急ぐ芸妓の姿があでやかだった。夜の華やかな雰囲気は、キャンパスがあつた平川や山口の旧市街のそれとは異なっていた。私が聞借りしていた家の大家も元芸妓さんで、そのころ三味線の師匠として若い芸妓に教える傍ら、座敷にもあがつていた。

「おねえさん」の声とともに家の玄関を入ってくる芸妓たち。それからまもなく聞こえてくる三味線の音。昼間、聞借り部屋でごろごろしていたほんくら学生の私とは、別の世界がそこにあつた。

その家に下宿しながら、私は日ごと考古学というお世辞にも派手とはいえない学問に熱中していく。恩師の八木充先生は、どのような気持ちでこの考古学熱中症の学生をみていらしたのだろうか。幸い考古学を卒業とすようになって、先生とは毎年一度お会いして、今も御指導を仰いでいるのだが、昔のことなどとも恐くて尋ねることができない。

現在の私は仕事から、湯田に隣接する山口の旧市街に大きな関心をもっている。室町時代の文化財を多くのごすこともさることながら、大内氏の館跡の発掘調査や整備が進んでいるためである。発掘成果は、大内氏の権勢を如実に物語り、東アジアの規模で展開した活動を現在に伝えてくれる。

一方、大学のキャンパスがあつた吉田・平川地区は、学生の街として大きく変貌

したと聞く。しかしあのころは、のどかな田園地帯であつて、刺激のない単調な世界が豊かな自然とともに、ただただ広がっていたように思える。

このように湯田・山口・平川と、まったく風土の異なる三地区を二十歳の私は自転車をこぎこぎ行き来していたのである。考えてみれば、けつして広いとはいえない盆地にこれほど雰囲気異なる三つの地区が隣接している山口という街は、はなはだ特異な街といえるのかもしれない。私はこの街からどのような影響を受けたのだろうか。また、うけなかつたのだろうか。推し測るには、余りにも長い時間が流れてしまったような気がしてならない。

(長崎県教育庁文化課)

## あの頃のこと

石風呂 和 典

(国史学・人文第六回卒)

私は十数年前の、人文学部国史学研究室の卒業生です。今は県庁の山口県史編さんのための事務局県史編さん室で勤務しています。

今振り返ってみると、一番の思い出は当時の人文学部の教官に混じってよくソフボールをやったことのような気がします。ですから先生方には「お前はソフトするのに大学院はいったんか」とひやかされたものですが、そのおかげで専攻以外の先生方にも顔を覚えて頂き、ソフボール以外でも色々とお世話になりました。

した。

今思うに、学生時代は大変貴重な時期だったと思います。見方によれば、人生で一番贅沢な時間を過ごすことができたからです。なぜなら、無駄と思われる時間を謳歌することができた時期だからです。例えば、歴史という一見実学とはほど遠いと思われる学問に触れたこと。例えば、何も考えずにぼーっとできる時間を確保できること、意味のない様なことを夜を徹して議論できること、とにかく無茶苦茶ができること、明日のことを考えないで遊べること等々。その贅沢な時間をどのような過ごし方をするかは、その後の豊かな人生を送るためのペースのひとつになるような気がします。

また、この大学、この学部、この研究室(国史学)に来て良かったのは、ここでの色々な人との出会いだっただけだと思いません。この人と出会うことが出来て良かったと思える人(先生、先輩、同級生、後輩・・・)と出会うことができたことです。そのような人とこの大学で出会えたことは私にとって大きな財産となっています。どのような人と出会うかということはその人の人生にとって大変重要な意味を持つてくるといって社会に出て改めて実感しています。

長い人生の数年を過ごしただけの学生時代でしたが、私にとってはなくてはならない時期であったことは間違いありません。

(山口県史編纂室)

## 留学の記

### ドイツ訪問記

本田 義昭

(ドイツ語学・ドイツ文学 文理第二十回卒)

今年の九月にドイツのエアランゲン大学に研究滞在する機会がありました。同僚のヒンターエーダーIIエムテ先生がこの大学の出身なので、私も数名の先生方と知り合いになっていました。今回は日本のアツカーマン教授に招待され、短期間ですが充実した日々を過ごすことができました。

ドイツでは大学生は二つの科目を専攻しなければなりません。ここで日本学を専攻している学生は約三〇〇人いるようですが、そのほとんどは副専攻のようです。ドイツでは大学での専門と職業との結びつきが強く、日本学を専攻にすると、就ける職種がとても少ないことがその背景にあるようです。彼らの専攻はドイツ学など人文系の分野が多いのですが、中には情報学や政治学などを専攻としている人もいます。また、エアランゲン大学には生涯教育として日本学を学ぶ社会人も十数名います。ほとんどは職業生活をリタイアした年配の人たちです。

私が滞在した九月は夏休み中でしたが、アツカーマン先生が私のためにゼミナールを二回開いてくださり、正規の学生と社会人学生を合わせて延べ三〇名の出席者がありました。ゼミの最初に私が「現代ドイツの社会変化と言語変化」という自分の研究テーマについて説明し、それについて出席者が議論する

という形で行なわれました。テーマが時事ドイツ語に関するとなので、ドイツに生活しドイツ語を母語とするゼミ出席者の方が私よりもはるかに知識が豊富で、そのような人たちの議論に加わって行くのはとても疲れましたが、ドイツ人の生の考えを知る上でとても有意義でした。議論には若い学生も積極的に参加していました。小学校からの学校教育が少数数での議論中心に行なわれているからです。東西ドイツ分断時代に旧東ドイツから西側へ亡命して来た年輩の学生が語ってくれた戦争前から現在までの体験談はまさしくドイツ現代史の縮図のようでした。

これらの人たちが日本に興味を持つようになったきっかけは様々です。若い学生の中には、子どもの頃テレビで「セーラムーン」や「キャプテン翼」などのアニメを見て日本に興味を持ったという人もいました。日本に旅行に行き、人との接し方がヨーロッパと日本ではあまりに違うことを知り、その違いがどこから来るのか見極めたいので日本語を勉強しているという人もいます。柔道や空手などを習っていて日本の精神に憧れ、本格的に学び始めた人もいます。

この人たちと話していて、彼らにはある共通性があることに気付きました。ドイツ人に限らず欧米の人たちは自分たちが世界の中心だという意識がとても強いのですが、自分た

ちとは異質の日本文化を学ぶことで、自分たちの物の見方や考え方を相対的に見る目をこの人たちは持っているようです。外国人と接する時に自分の考えを一方的に押し付けるのではなく、相手の考えや立場を思いやる心のゆとりが感じられます。翻ってこのことは日本で外国語を学ぶ意義にも通じるところがあります。外国語を学ぶ目的はその言語の背景にある文化を学ぶことであると、誰もが知っています。外国語と外国文化を通して日本語と日本文化を見つめ直す機会でもあるのです。自分の物の見方や考え方が唯一絶対のものではなく、世の中にはいろいろな生き方や価値観があることに気付くことは、外国語の成績以上に大切なことのように思えます。

今回のドイツ滞在中は、鴻文会の会員でフルダ市郊外にお住まいのカウフマン越川智子さんのお宅を訪問させていただき幸運にも恵まれました。三年前に会員名簿の編集作業をしている時に、ドイツ在住の会員がいっしょやることを知りました。ドイツ語教師という職業柄気になってはいましたが、まさか会うことはないだろうと思っていました。ところが二年前にそのカウフマンさんから鴻文会宛てに電子メールをいただき、それ以来時々メールをやり取りしていました。今回のドイツ行きをお知らせしたところ、お招きを受け、ご主人も一緒にフルダの街と旧東西ドイツ国境を案内してくださいました。ドイツ統一から十年経ちましたが、旧国境を挟んで家並みはつきり違っていることに驚きました。ご夫妻をお尋ねしたことで、このドイツ旅行がいつそう印象深いものになりました。紙上を借りて御礼申し上げます。

(人文学部教授)

## オランダ印象記

上野修

一九九九年の十月から十ヶ月間、機会をいただいで、オランダはロッテルダム市のエラスムス大学に研究滞在しました。「なんでまた、オランダに？」とよく聞かれます。「洋行」なら英独仏米といったゴージャスな「大国」を目指すもの。なんでそんなちっぽけな、せいぜい風車とチューリップぐらいしか知られないような国に……。同じ質問を、実は向こうのオランダ人たちからもよく聞きました。「なんでまた、わざわざオランダなんかには？」オランダ人は概して、少々気難しい人でもひどく明るい眼をしているのですが、「以前、パリにいたこともあって、それに比べると」とこちらが切り出すと、彼らはその眉を曇らせ、「ああパリはいいですね。われわれのところはこれといってすごい料理もないし、すごい宮殿や大聖堂もない、これといって有名な人もいないし、それに洒落たブランドものもあまりないし……」。それはみな、あたっている。華やかな中央の宮廷文化も荘厳な大聖堂も偉大なスター的存在もこの国はついに持つことがなかった。やっと九州ぐらいの人口と国土の、女王様が市電に乗って買い物に出かける、大部分が海面下にあるフラットな小さな国。しかし、そういう国

が昔日、そんなふうのままでヨーロッパの最先進国だったとすれば、これはすごいことでしょう。私はそういう国が生んだ第一級の哲学者、スピノザの研究にやってきました。「はあ、じゃあ、あの……」と、彼らはそのとき、あまりに高額でめったにお目にかからないギルダー紙幣の、悪戯っぽい目をした哲学者の肖像に思い当たるのです。私たち一家は郊外のアパートを借りました。窓から見える風景はまず大空です。カモメと飛行機雲の走る清澄な空の下、煉瓦色の小さな屋根と、オランダ人みたく背の高い並木が青々と打ち続き、その向こうを時々、アイセル川を行くらしい船舶の巨大な煙突とマストが移動していくのが見えます。広い縁の中庭を挟んで向かいの棟のベランダが並んでいるのですが、いつでもどこかの家でせつせと窓磨きをしている。あんまり窓が広くて明け透けなので、お向かいのさらに向こうにある棟までこちらから見えてしまう。反対側が駐車スペースになっていて、反対側が、そこにもある日のつばのチームが現れて、敷き詰めた煉瓦をいともたやすく剥がしては小山に積み、下から出てきた砂浜のような土を均したかと思うと、またあつというまに綺麗に埋め

戻してしまつた。まるでロゴ遊びです。と、今度は巨大なクレイン車のようものが現れ、のっばになり過ぎた道路のようなのものが来て切り株を粉砕し、子供たちが見物する中、あつというまに新しい若木に植え変わる。粉砕屑は大事にどこかへ運んで行ったようですが、あとでそれが、柳と水路の散歩道にちゃんと敷き詰められているのを発見しました。勤勉で工学的で合理的なのです。そしてなんとというロー・テンション。この国では八割が英語を話すといわれています。お店などでこちらが拙いオランダ語で話そうとすると、いいんだ、無理しなくても、という感じで、決して正確とは言い難いが英語で対応してくれる。「ここじゃ豪華な暮らしをしたい奴はベルギーに行くんだ」。どうもそのようで、特にロッテルダムでは移民も金持ちも見た目は違わない。とにかく居丈高なのが嫌で、気楽に共存しているのがいいようです。カモメみたくだなどと思いましたが、どれもよく似ているのに、一羽一羽は好き勝手やっていて、けれどもちゃんと付かず離れず暮らしている。それはどこにも「中央」を持たないこの国のあり方にも似ています。「異文化」には頓着しない。お向かいのベランダに現れるカッパルには、黒い肌と白い肌、白い肌と黄色い肌、コービー色の肌と白い肌、というふうの色々な組み合わせがあつて、それで誰も困らない。

面白いことに、十七世紀の旅行記な

どを見ると、当時も同じような感じだったらしい。その時期、多くの哲学者がオランダに移住します。デカルトも、「これほど全き自由を味わうる国、これほど安らかに眠りうる国、われわれを守るために常時怠りない軍隊のある国、毒殺や裏切りや中傷はどこよりも稀で、われわれの祖先の無邪気さの名残をこれほど多くとどめている国はほかにあろうか」と記しています。わがスピノザも、「この栄える国家、この卓越した都市ではあらゆる種類の民族・あらゆる種類の宗派に属する人間がみなきわめて和合的に生活しており、また彼らが人に信用貸しをするにあたってはその人間が富者か貧者か、またその人間の平素の行動が正直か欺瞞的かを知れば足りるのである」と書いてあります。スピノザは亡命ユダヤ商人二世でした。きつこの国は交易と絶えざる浸水の脅威と闘う治水工学の合理性をあわせ持つて、独特の開放的な文化を作ってきたのでしよう。「オランダの戦車隊はね、ラフで一見まったく統率が無いみたいに見えるけれど、各自が持ち場での確に判断して連繋するから、一番強いんだぜ」。それじゃまるでサッカーではないか、と、指揮官でもあつたという大学同僚の話聞いて思わず関心してしまいました。今年には日蘭通商四百年だそうです。

(人文学部教授)

## 新任教官の紹介

## 菜の花に思う初心

真木 隆行

(歴史文化・講師)

大学の先生というのは、想像以上に忙しいものですね。これまで私は、大学生・大学院生の立場で先生方に接してまいりました。さすがに博士過程に入ると、大学は大変だという愚痴めいたセリフを聞く機会も多く、一見のんびりして見えるのは誤解であったと、頭では理解していたつもりでありましたのに。

今年二〇〇〇年四月に、本学の講師として赴任いたしました。日本中世史の分野を担当しております。一年目ですの色々負担を軽減していただいているはずですが、今の私にとって一番大変なのは講義です。三月までの五年間、大学院に籍を置きながら、大阪の某私立高校で週に十六・十七コマの授業を非常勤で担当しましたが、言うまでもなくそれは全く異なる職場です。今年度の担当は、講義・演習が週に五コマなのですが、なかでも僅か一コマ分の講義で次週どう話をしようかという悩みが日々頭から離れず、先輩の先生方々への尊敬の念は増すばかり。所詮、講義をうまくこなすには、自分の研究を深めてゆく以外に道はありませんので、まだ駆け出しの私には講義改善と研究深化とを並行させることが課題になります。

専門では、日本中世の半ばの政治・社

会の変動をどう位置づけるかというのがテーマです。当面は、従来通り京都の東寺とその莊園(山口県では秋穂・二鳥庄・美和庄があったようですが…)を素材としながら、莊園領主層の動向を切り口に考えてゆきます。しかし、そもそもこのような研究に入った出発点は、私の生まれ育った愛媛県の芸予諸島への関心でした。海賊史研究を全体史の中に位置づけること、これが私の「晩年」の研究テーマです。

不安と期待の思いを胸に山口へ引越してきた際、あまりの美しさに目を奪われたのが、樫野川兩岸に咲いた一面の菜の花でした。このように豊かな自然の中で、おとなしくも意外に個性的な学生さんたちに囲まれながら、厳しく楽しく精進してゆく所存であります。樫野川沿いの菜の花を見るたびに、毎年この決意を新たにしたいと思えます。

皆様どうぞよろしく願っています。



## 随想

## 山口の三十年

石井 大

昭和四十七年十月に山口大学に赴任して以来、三十年になろうとしている。長い歳月を一所に過ごして最長の居所となった。「秋十とせ却て江戸を指す古郷芭蕉」という思いは確かに自分の中に有るのである。十年の三倍も山口に住んでみると、ここに安らぐという実感なのである。所用で県外に他出していざ帰りなん、と県境に踏み込むと、急に安堵の気持ちに包まれるのは、何故なのか。そこに何かが存在する、としか言いようがない。

三十年の間に、山口の町並みも、山口大学も、それを圍繞する山稜の光景も、形を変えてきた、表の形はそうである。そうであるが、裏の形は一向に変わってはいない。何処の町もそうである。少し丁寧に探索すれば、昔を今に呼び戻す記憶の材料を見付けることは出来るのである。日本人の生活の基本の形が激変しない限り、昔は今もある。

山口大学文学部という昔の形が、奇妙に戦後のある時期の匂いを残していた、その頃に、平川には白鷺が舞っていて、田圃の小川には、夏の蜩が、多くはない数の光の明滅を残していた。大学正門の前の道路は、小郡まで通じていなくて、

舗装した部分は、平野のバス停の手前まで。車は時折、文字通り時折である、一台が目の前を通過して、振り向いてその姿が視界から消えた頃、また一台が目の前を通過して行った。雨上がりの舗装された道の両端から少し中程に迫り出して、雨蛙が無数に這い出していて、そこを踏むともなく、踏まないともなく、雨靴で歩いた。正門前の文栄堂書店は、ひそやかな本屋さんであった。右手に山陽種苗が今よりは小さくて、コンクリートの社屋は後に出来たものである。徳光商店という食品雑貨の小店が学生によく利用されていた。その店の同じ通りに、学生相手の淋しいレストランがあった。その他は周辺農家の家々と、幾つかの長屋棟の下宿屋が散在する以外、遠景は悉く田圃である。大塚のバス停先に、小規模の団地があり、その奥に県営住宅が、昭和三十八年に建てられた。平川は山口市内ではなかった。郊外の淋しい場所、学生はそこを「平川砂漠」と云う、そこは静かな場所であった。

山口大学文学部は、山口大学理学部と山口大学人文学部が変わった。校内には木々の緑も豊かになった。建物の数も

増えた。女子学生の数も増えた。正門前を走る車の数も激増した。校内駐車の数も、学生の車と交通事故も増えた。昭和から平成へと、学生の気質も年々に変わりつつある。学生生活にある種の焦燥と虚無の両様の気配が見られるのは、如何なる理由によるのであろうか。豊穡な人生を約束するための思索の時と静けさが、様々な改革や変化の中で失われることなく、人間に必要なものであるという認識、人声や足音が懐かしさを呼び起こす共生の感覚、それらの価値が、疑いもなく尊いものとして、充実して密度の高い存在そのものとしてあるという実感を、昔に変わらぬまま持ち得るといふ希望を、大がかりに保障するという責任はあるのだから。大学という泉のほとりに知恵と慰めを求めて、又旅立つ時に、希望と勇気を与えられて、輝きの町の名・平川を学生たちは忘れないであろう。表の変化と、裏(こころ)の永続とは、その関係にある。

山紫水明の都にありて、酔い痴れて無為にして三十年、人間到處有青山、とそう思い決めて住んできた。この此処の地に、生と業とを終わらせても、四時の変化に私なからんことを。造花の神に稽首して、唯に恩寵を謝するのみ。私の墳墓は山口にある。碑銘は後日に計らう。

平成十三年三月退官日記之。

(人文学部教授)

### 研究室だより

#### 独仏語文化論コース

本コースは、小講座制時代の、ドイツ語学・ドイツ文学とフランス語学・フランス文学の二専攻を統合したコースです。学生定員は一年生二十名ですが、現在四十五名の学生が在籍しています。ここ数年、ドイツ語学・ドイツ文学を学ぼうとする学生が多く、四十五名のうち三十名がこれを専攻し、残る十五名ほどの学生がフランス語学・フランス文学を学んでいると思われまます。ただ、現二年生十七名は、まだ指導教官が決まっておらず、これは確定した数字ではありません。

現在、ドイツ語系教官は、岡光一浩、ヒンターエーダー||エムデ、坂本貴志(佐野晴夫先生の後任)、本田義昭、下野正利各先生の五名がおられます。岡光先生は、十九世紀末から二十世紀初頭のミューンやウィーンの文化、ドイツ語圏のカフェとサロン、留学の問題などが研究テーマで、本年度は、ドイツ文学特殊講義、同演習・講読の授業を担当されています。ヒンターエーダー||エムデ先生は、ドイツ近代文学、比較文学が専門で、ドイツ文学演習、ドイツ語演習(会話)の授業をもたれ、坂本先生はドイツ近代文学の専門で、フリードリヒ・シラー研究に取り組み、前期にドイツ文学特殊講義、同講読を担当されたあと、後期からは文部省在外研究員としてドイツに出張されています。本田先生はドイツ語学を専攻され、現代ドイツ語の特徴を浮き

彫りにすることを研究課題とし、ドイツ語特殊講義、同演習の授業を受け持たれています。下野先生はゲルマン語比較言語学が専門で、音韻論・形態論を中心とした研究に取り組み、現代ドイツ語概説、ドイツ語学演習の授業を担当されています。

フランス語系教官は、平山豊、武本雅嗣(高垣由美先生の後任)の各先生と井上三朗の三名で構成されています。平山先生は現代フランス小説が専門で、ロブ||グリエの作品を中心に研究し、本年度は、フランス文学講読、フランス語演習(時事フランス語・フランス事情)の授業を担当されています。武本先生はフランス語学、言語学が専門で、現代フランス語の統語論・意味論を研究テーマにし、フランス語史(前期)、フランス語学特殊講義(後期)、同演習、フランス語演習(作文)の授業を受け持たれています。井上は、近・現代フランス小説の研究に加えて、比較文学の領域も手がけ、この立場から、高橋たか子、福永武彦などの作品を研究し、授業はフランス文学史、文学演習・講読を担当しています。各教官の専門、研究テーマ、本年度の担当授業科目を紹介してまいりました。学生の卒業後の進路は、教員・公務員とほとんどです。大学院進学者は最近はおられません。では、卒業生の皆様のご健勝とさらなるご発展をお祈り申し上げます。機会があれば、研究室にもお越し下さい。お待ち申し上げております。

(井上三朗教授)

### 山口大学人文学部

#### 公開講演・講座

#### 第十三回公開講演

テーマ 夏目漱石の文学における〈内〉と〈外〉  
とき 平成12年12月2日(土)  
ところ 防府市文化福祉会館  
演題 「あるドイツ人から見た漱石文学」  
講師 本学部助教授 ヒンターエーダー||エムデ・フランツ  
演題 「漱石の〈日曜日〉」  
講師 本学部助教授 石川 巧

#### 平成十二年度

#### 山口大学人文学部公開講座

テーマ 変容する日本の社会と生活文化  
期 平成12年10月21日、12月2日の各週の土曜日 6回シリーズ  
会場 山口大学人文学部  
日程・内容・担当講師  
第一回 「変容する青年期」 高橋征仁 助教授  
第二回 「変容する日本の地域社会」 横田尚俊 助教授  
第三回 「少子高齢化社会の課題」 辻 正二 教授  
第四回 「変容する消費文化」 坪郷英彦 教授  
第五回 「変化する『日本的なるもの』」 山本真弓 助教授  
第六回 「変容する『国民国家』の歴史と展望」あるいは「国民」という〈怪物〉について 額 厚 教授



## 平成12年度事業計画

1. 第24回役員会（5月27日）
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会（9月の予定）
3. 「鴻文会会報第20号」発行（12月の予定）
4. 山口大学同窓会連合会
5. その他

## 平成12年度予算

## 収入の部

科 目	12年度予算額	11年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	176,551	139,029	37,522	
会費収入	2,100,000	2,100,000	0	10,000円×210人（12年度入学者数）
名簿収入	10,000	40,000	△30,000	2,000円×5部
繰入金	0	0	0	
雑収入	200,000	40,000	160,000	同窓会連合会家賃、預金利子、その他
合 計	2,486,551	2,319,029	167,522	

## 支出の部

科 目	12年度予算額	11年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	100,000	0	役員会、その他
印刷費	200,000	300,000	△100,000	会報印刷（4,500部）
郵送料	370,000	370,000	0	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	800,000	800,000	0	家賃、人件費、事務所経費（電気、水道、電話、町内会費）
事務費	100,000	100,000	0	会報発送などアルバイト謝金、消耗品、その他
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会費
慶弔費	40,000	30,000	10,000	
積立金	600,000	400,000	200,000	特別会計へ繰入
予備費	176,551	119,029	57,522	
合 計	2,486,551	2,319,029	167,522	

## 特別会計

科 目	12年度財産	11年度財産	比較増減	摘 要
定額預金（S.63年）	0	600,000	△600,000	
定額預金（H.3年）	1,000,000	1,000,000	0	
中期国債ファンド（H.10年）	1,003,397	1,003,397	0	
中期国債ファンド（H.11年）	400,010	400,010	0	
中期国債ファンド（H.12年）	1,409,520	0	1,409,520	一般会計積立金から繰入（60万円） および満期の定額預金（S.63年）から （809,520円）
合 計	3,812,927	3,003,407	809,520	

## 平成11年度事業報告

1. 山口大学創立50周年式典(4月23日)
2. 第23回役員会(6月19日)
3. 第24回役員会(9月4日)
4. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(7月22日)
5. 「鴻文会会報第19号」発行(12月28日)
6. 山口大学同窓会連合会

## 平成11年度決算

収入総額 2,203,505 円 支出総額 2,026,954 円 残額(次年度繰越金) 176,551 円

## 収入の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	139,029	139,029	0	
会費収入	2,100,000	1,910,000	△190,000	10,000円×191人
名簿収入	40,000	27,000	△13,000	
繰入金	0	0	0	
雑収入	40,000	127,476	87,476	同窓会連合会家賃(半年分65,000円)、預金利子、その他
合 計	2,319,029	2,203,505	△115,524	

## 支出の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	66,834	△33,166	役員会、その他
印刷費	300,000	131,250	△168,750	会報印刷(4,000部)、封筒印刷
郵送料	370,000	356,535	△13,465	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	800,000	748,900	△51,100	家賃390,000円(32,500円×12)、人件費308,900円、事務所経費50,000円(電気、水道、電話、町内会費)
事務費	100,000	31,223	△68,777	消耗品、その他
寄付金	100,000	100,420	420	日中学術交流奨励会
慶弔費	30,000	70,000	40,000	山口大学創立50周年祝金、その他
積立金	400,000	400,000	0	特別会計へ繰入
予備費	119,029	121,792	2,763	山口新聞広告掲載料(21,210円)、電報料、その他
合 計	2,319,029	2,026,954	△292,075	

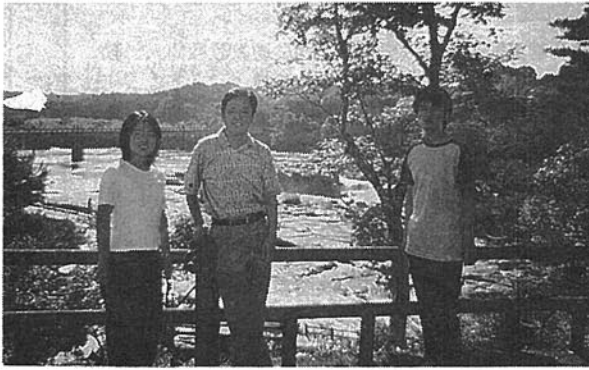
## 特別会計

科 目	10年度財産	11年度財産	比較増減	摘 要
定額預金(S.63年)	600,000	600,000	0	
定額預金(H.3年)	1,000,000	1,000,000	0	
中期国債ファンド(H.10年)	1,001,637	1,003,397	1,760	
中期国債ファンド(H.11年)	0	400,010	400,010	一般会計から繰入 利息10円
合 計	2,601,637	3,003,407	401,770	

平成12年5月27日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 藤井英樹  
北川健





鹿児島県大口市 日本語文化論方言調査

石井先生をお迎えし、遠くは大阪からもご参加下さり、地元開催の利もあって下関方面から4名の方々のご出席。功山寺やお隣の博物館をめぐる思い出話、たれその近況を肴にした軽妙なご挨拶などアツという間の2時間でした。

本年度の同窓会ですが、室田先生から紅葉狩りと本場のフグを賞味しようとのご提案もありました。平成十三年の春には石井先生が定年でご退官になるご予定でもあり、今回はその送別会とのドッキングを企画してのんびり構えておりまして、石井先生から要旨次のように申し渡されました。「わが信念により最終講義も同窓会による送別会も堅く辞退したい」とのこと。紅葉には間に合いませんが、庶務としては「フグの賞味会」

を今年度(2月中)に実現させるよう、思案致しております。会長の小田先生ともご相談し改めてご連絡申し上げます。

さて、この場を借りての求人。庶務の仕事も十七年を越えました。大学は息つく間もない忙しさ、年相応に学問以外の仕事もあり私死にそうです！会計管理や案内状の発送。国文科卒業生の中で専念していただける方いらっしゃいませんか。

(国文学・文理第十七回卒)

## 異文化交流研究施設

滝野 正二郎

### 1. 主旨

人間は、単なる個として孤立して存在するのではなく、その人間が属している社会・集団(民族・国・地域など)と必ず関わって存在しており、人文科学・社会科学が対象とする領域に於いては、人間としての普遍性よりも、特殊性こそがまず現れる。故に、自然科学とは異なり、人文科学は一旦、特殊な対象について研究を進める。しかし、それは単なる個別特殊に埋没するものではない。その個別対象に埋没するがごとき肉薄を行なうとき、必然的に、対象と自己との差異の発見へと結果するものなのである。これを契機とすることによって初めて、個別特殊を超越した、あるいは個別特殊を貫く普遍性を探り当てるのが可能になる。自己を知って他を知り、他を知って自己を知る、そこに、個性と個性の間にある差異を前提とした相互理解が可能となり、

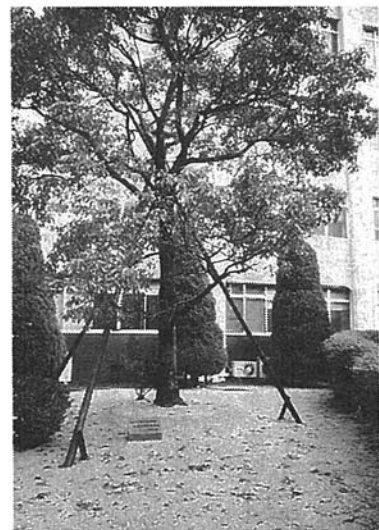
個性の差異を内に含んだ普遍性が得られる。この普遍性は、追求に先立って特殊と思われる部分を捨象した結果得られた普遍性とはおのずから質を異にするものであり、このような特殊を乗り越えた普遍性を得たときはじめて人間性そのものが深処において解明されるのである。このような観点において人文学部異文化交流研究施設は研究・交流プロジェクトを推進している。

### 2. 研究プロジェクト

本施設は、研究部門と交流部門の2部門によって活動している。

研究部門では、平成九年度より「21世紀後半を読む」を推進中であり、十年度には、6回の研究会(公開による講演会・シンポジウム)を開き、二一世紀にむけグローバルゼーション・情報化が進んで行くにつれて、事物の「身体性」が希薄になり、上述の個別特殊性が希薄になりかねないという懸念が提起されたが、グローバルゼーション・普遍化が進むにつれて、逆に個別特殊性こそが――また、個別特殊を貫く普遍性こそが――より重要になってくるという結論に達した。これは本交流研究施設設置の趣旨とまさに合致しているといえよう。これについては現在報告書を作成中である。

さらに本年度、①ある地域、ある集団固有の文化的現象に関する研究、②人類の文化的現象に関する比較文化的研究、③異なる二つ以上の文化集団・現象の接



触・交流に関する研究、の視点から研究プロジェクトを募集し、「アジアの歴史と文化に関する研究」・「戦後日本文学とフランス文学」・「教育現場における日本人と非日本人との文化接触の研究」・「政治権力の諸相―政治権力の歴史的研究および異文化間比較」・「死生観の比較文化論的共同研究」という五プロジェクトが採択され、研究が進行中である。

### 3. 交流プロジェクト

交流部門では、海外で活躍されている木本絹子氏(国境なき医師団)・ヤナイヨシロウ氏(ドミニカ共和国公使参事官)をお招きし、6月と11月に、学外を含めて四度の講演会を開催した。

以上の各プロジェクトの成果は「異文化交流研究施設ニューズレター」にて公開していく予定であります。

(人文学部助教授)

平成十一年度

人文学部卒業生・

大学院修了生進路状況

人文社会学科

建設業

積水ツューホーム中国、松浦住宅

製造業

中央出版、大村印刷、大成社、ノエビア

電気・ガス・熱供給・水道業

中電工

運輸・通信業

福山通運、宮崎交通

卸売・小売・飲食店

内外グループ、鈴花、小西衣料機器、

GAKUYA・Co・Ltd、ヒマラ

ヤ、山口日野自動車、シャポー、ジェ

リーサダマツ、周南農業協同組合

金融・保険業

三光商事、新光証券、小倉興産、フジ

フューチャーズ、武富士、レイク

サービス業

鳴戸法律事務所、ファイトグループ、

トライグループ、KLC、社会福祉法

人健祥会、ジャイカ、上組、サニック

ス、ノヴァ、ジーテック

教員

大分県立羽室台高校、山陽女子高校

公務員

中国郵政局、山口県庁、山口市役所、

防府市役所、府中市役所、大分市役所、

有田町役場、簸川町役場、和木町役場

進学

九州大学、広島大学、山口大学、大阪市立大

学、奈良女子大学、静岡大学各大学院、計16名

入学年度別学生数

学 科(専攻)	性別	12	11	10	9	8	7	6	5	計
人 文 学 部	人 文 社 会 学 科	男	46	45	67	44	15	6	5	228
		女	64	55	40	66	9	0	2	236
	計	110	100	107	110	24	6	7	464	
学 部	言 語 文 化 学 科	男	24	34	28	14	8	2	2	112
		女	81	65	77	87	7	1	3	321
	計	105	99	105	101	15	3	5	433	
部	合 計	男	70	79	95	58	23	8	7	340
		女	145	120	117	153	16	1	5	557
	計	215	199	212	211	39	9	12	897	
人 文 学 部 研 究 科	地 域 文 化 専 攻	男	8	6	1	2				17
		女	7	3	5					15
	計	15	9	6	2				32	
学 部 研 究 科	言 語 文 化 専 攻	男	2	2						4
		女	4	2						6
	計	6	4						10	
合 計	男	男	10	8	1	2				21
		女	11	5	5					21
	計	21	13	6	2				42	

言語文化化学科

建設業

竹中工務店、積水ハウス、山口中央ホーム

製造業

大成社、一誠社、サンデー山口、立川

林産

運輸・通信業

九州国際サービス、ジャルスカイサービス

卸売・小売・飲食店

ジーンズ・カジュアル・タン、フジ、ハーテ

イウォンツ、マルヨシセンター、明屋書店、カ

ネボウ化粧品中四国販売、トヨタカラーラヴ

マリン、日本マクドナルド

金融・保険業

網中、鈴花、コスモフューチャーズ、国

際証券、東京海上火災保険、安田生命保

険相互福岡フローラ営業部、第一生命保

険相互、東京ゼネラル、大分県信用組合

サービス業

英進館、学友舎、敬仁会、OTA、PR

ODACITION、東洋電器、富士通鳥

取システムエンジニアリング、九州映像、

山口情報処理センター、佐川コンピュー

ターシステム、ヒロケイ、フォーサイト

システム

教員

鳥根県出雲市立簸川中学校、愛農学園農

業高校、学校法人岩田学園

公務員

山口中央郵便局、山口市役所、広島市消

防局、広島県海田町役場

進学

九州大学、山口大学、ノートルダム清心女子大

学、大阪大学、九州大学各大学院、計8名

日本メデイカル福祉専門学校、大阪市立

大学3年次編入、早稲田大学

大学院人文科学研究科

地域文化専攻

京都大学大学院博士課程

言語文化専攻

住まい町づくりセンター

転居先不明者一覧表

左に転居先不明の卒業生のお名前を掲載いたします。来年度には同窓会の開催、鴻文会名簿の発行も予定されており、名簿には空欄が少なからず、この際、皆様のなかでそれらの方々の現住所などご存じの点がございましたら、鴻文会連絡事務所までお知らせください。

〒七五三〇八三一

山口平井七七三一二 沖田ビル二〇二

鴻文会連絡事務所

TEL・FAX(〇八三)九二八―四五二七











## 編集後記

※同窓会報「鴻文」第二〇号発行の運びとなりました、お手許にお届けいたします。編集後記を書きながら「あ、記念号だったのだ」と気付くという位いたらく。その編集を担当させていただいたのは私にとって光栄なことでしたが、力量不足はいかんともしがたく、ご寄稿くださった方々、会員各位のご期待に十分には応えられなかったのではないかと思ってお

ります。特に格別の企画もなく、鴻文会としての大事な節目を漫然と過ごしてしまいました。お詫びを申し上げます。ただ、本号には、これまで種々の事情でできなかった「転居先不明者一覧」を、根ヶ山学内幹事のご尽力により掲載することができました。どうかお目通しくださって、ご存じおりの転居先がありましたら、鴻文会事務局まで是非にご一報ください。来年は会員名簿作成の予定に致しております。少しでも空欄を埋められたらと念ずるものです。

※山口大学人文学部の創立十周年を記念して鴻文会が寄贈・植樹いたしました二本の楠は、その後十年を経過して活着し一回り大きくなりました。その楠の側には、当初鴻文会が建てました木製の「山口大学人文学部創立十周年記念樹」の碑がございました。それが雨風にさらされ朽ちてきておりましたところ、この度人文学部後援会のお力で石碑に作り替えられました。この場を借りて感謝申し上げます。次第です。本会報12ページに写真を忍び込ませております。ご覧おきください。

※来年度は、大学院東アジア研究科（後期3年博士課程）の設置（予定）や生涯学習土曜日講義の開設など、人文学部にとって一段の飛躍の年になりそうです。周囲の方々へも広げていただけるとありがたいと存じます。

※本号にご寄稿くださった方々には心から御礼を申し上げます。  
(添田)